

第二期平川市まち・ひと・しごと創生総合戦略（素案）についてのパブリックコメント

1、きっかけ

弊社は、建築設計事務所を営んでいる。神奈川県横浜市にオフィスを構え、代表の故郷である平川市に本社を構えている。現在2拠点経営を送る。

生まれ育った故郷に家族と共に暮らし、事業を行う中で、家族と地域の未来を常に思い描いている。「未来の平川市に何が必要か」という考えから、今回のパブリックコメントの寄稿に至る。

弊社は、五常（仁義礼智信）を経営理念として掲げ、家づくり場づくりを通して家族の幸せを追求している。

※経営理念：我々は五常（仁義礼智信）を大切に、心豊かに感じ、考え、実践し続けます。

平川市の職場・学校・家庭の幸せは、青森県の幸せにつながり、全国・世界の幸せにつながる。3で詳しく言及するが、平川市の幸せな未来は、まちづくりの最小単位である家族の幸せに強く影響している。実際の行動に向けた考え方を以下に提案する。

2、提案への背景

現在弊社は、平川市のまちづくりに積極的に関わっている。「平川市を本気で良くしたい」という熱い想いから、平川市の移住事業などを見てみると業務依頼ありきの印象をうける。人口問題などの地域課題を解決するためには、まず平川市と市民一人一人が長期的な視点を持ち、自立したビジョンを描く必要があると感じる。そして、市と民間それぞれと信頼関係がある中間的な組織が必要だと強く感じる。

平川市と近隣地域の市民へのヒアリングを続ける中で感じたのは、移住者への移住後のケア不足・若者の人口流出・価値観の多様性が低い・こどもの将来設計の単一化・町会の衰退などが浮き彫りとなった。市民の抱える地域課題はまちづくりの過程の中で行う、家族単位で行う将来のイメージづくりや、中間的な組織の存在がカギになる。

3、第二期総合戦略の政策分野と基本目標についての提案

政策分野1 地域に根ざす安定した仕事づくり

農業の多様性

全国的な視点で見ると、「農業を始めたい」と感じ、移住などをして農業への職業選択を検討する層は、東日本大震災以降増加傾向にある。流通にのせず、自ら販売経路（ネット通販など）を形成する「小さな農家」が増加傾向にある。合わせて若年層ではオーガニック思考、有機農業への関心が高まっている。無農薬農家への関心や、農業従事者全員が持続可能な農業への意識を持つ機会があれば、平川市の農業の多様性へつながる。農業の多様性が生まれれば、平川市への移住検討者も増えるのではと感じる。

そのためにも、農業者が従来の農業経営だけでなく、農業者自身の理念とビジョンから逆算した経営の視点を持ち、学び続ける必要がある。平川市として、学ぶ機会の提供と次世代の人材育成が必要と感じる。

政策分野2 いつまでも住み続けたいまちづくり

大人の生の声をこどもたちへ届ける

青森県の人口流出の傾向を見ると、18才と22才の年齢層で大きく転出率が上がっている（まち・ひと・しごと創生平川市人口ビジョン平成27年11月よりP13参照）。高校卒業や大学の進路選択のタイミングでの転出と考えると、そこにうまくアプローチが出来れば、転出することを選択したこどもたちもUターンを検討材料とする可能性が出る。

そのために、官民が連携し、目標に向かって挑戦する大人の生の声をこどもたちへ届ける機会が必要と感じる。同時に一方のコミュニケーションだけでなく、大人とこどもの対話を通じて双方に学び合う時間と場があると良いと感じる。

政策分野3 若者世代の希望がかなうまちづくり

家族の将来像 明確化

まちづくりの最小単位は家族だと考えると、家族の将来像（ビジョン）を明確化することがカギになる。平川市の全体像として「住みたい・産みたい・育てたい」を達成するためには、家族とのコミュニケーションの中で「これから家族がどう暮らしたいか、どう在りたいか」を描く必要がある。そのために、家庭でできる道徳や教養分野を重点的に取り組む必要がある。また、弊社ではこれらを踏まえた「青森こども論語塾」を主催している。日常的な家族との対話やふれあいが、結婚・出産など人生のライフイベントに影響すると感じる。

移住体験ツアーなどで、移住者と地域をつなげる動きをしているのはとても良いと感じる。移住者に必要な情報や体験ができる企画は素晴らしいと感じる。

一方で「地域と移住者の信頼関係づくり」としては少し弱いと感じる。移住後の暮らしに必要なのは具体的な仕事をどうするかとか現実的な話を気軽にいつでも相談できる人とのつながりだと感じる。

そこで、自治体窓口として移住者の悩みに総合的に対応してくれる伴走型の機関があつたら良いと感じる。移住者の課題は多岐に渡る。仕事、子育て、雪国の暮らしなどをしっかりとヒアリングして、専門家とつないでくれるコーチ、カウンセラーのような動きのできるコーディネーターが必要だと感じる。すでに弊社として、理念・ビジョンづくりを軸とした家づくりに取り組み、コーディネーター的なポジションの相談対応や提案を行っている。

4、まちづくりへの想い

人口減少社会が進み、インフラ機能が消滅後は町はどうなるか。平川市の未来を持続可能なものに動かすのは「人」である。八幡崎地区やアソビヒラカワさんのおもてなし精神は平川市の大きな財産である。移住後起業した井上ご夫妻が経営する0172さんや、移住者へ精神的なサポートをしてくれる金剛寺さんの存在も、貴重な地域資源である。

平川市に暮らす「人の魅力」にスポットを当てた人物取材などの細かく分かりやすい情報発信も必要だと感じる。

今回の提案は、3期にどうつなげるかが重要である。2期の取組から学び、行政だけでなく平川市民自身が取り組むまちづくりが可能となる。

平川市の将来を担う子どもたちへは家庭環境が大きく影響する。3期目の先も、家族や人づくりへのアプローチが重要となる。

2020年3月12日

アップルアーキテクト株式会社 代表取締役 菊池 暢晃

企画戦略室 室長 平林 史恵

(スチームファームデザイン 代表)